

# 短篇小説論(11)

## —ウィルキー・コリンズの negative realism—

### The Study of Short Stories(11)

赤岩 隆

(Takashi Akaiwa)

ディケンズの世話になったということでは、ミセス・ギヤスケルのほかにもうひとり、ウィルキー・コリンズがいる。ミセス・ギヤスケル同様、コリンズも短篇小説の名手として知られ、長篇小説と並んで、短篇小説の名品を数多く残している。その意味では、ふたりはじつによく似ていると云えそうだが、作品の核心を成すリアリズムという話になると、まるで違ってくる。そのことは、コリンズの代表作である『白衣の女』(1860)や『月長石』(1868)を読んだことのある読者なら、容易に推測が付くはずである。本稿においては、この点について、とくに短篇小説の面から明らかにしてゆきたいと思う。

まず最初に突き当たる壁は、ミセス・ギヤスケルの場合と同様、単純にその作品数の多さである。すなわち、50を超す短篇小説のなかから、いかに今回取り上げる作品数編を選ぶか、それであるが、手始めに解かり易い事実から確認しておこう。第一に、1824年生まれのコリンズは、1843年の最初の短篇小説から、没年(1889年)の2年まえに到るまで、生涯を通じて短篇小説を発表し続けたのだが、途中60年代を中心に、12年ほど、いわば空白の期間をあいだに挟んでいるということ。ちょうど上記代表作がディケンズのオール・ザ・イヤーズ・ラウンド誌に連載され、そのち単行本として出版された期間に相当する。60年代の文学

的な特殊性については、前回触れたとおりだが、コリンズがその中心にいたことは、短篇小説をめぐるそうした執筆状況の変化ひとつ取っても、一目瞭然と云ってよい。ようするに、それら事情を都合よく捉えて、コリンズの長い作家人生を、前半と後半のふたつに分けて考えようというわけだが、じっさい、そのようにして作品一覧を眺めてみると、60年代を前後して、出版された短篇小説集の性格に顕著な違いが認められないこともない。すなわち、60年代よりまえの短篇小説集には、出版に際して、いわゆる枠の構造が意図的に付与されているのに対して、それよりあとの短篇小説集においてはそうになっていないという違いである。これは、コリンズが短篇小説というものをどのように考えていたのか知るうえで、重要な情報になると思われるが、許された紙数に限りのある本稿においては、無理に深入りしないことにする。

第二に、これは執筆時期の前後半に関係なく、(あるいは、長篇小説においても同様に)、題材あるいはモチーフとして「結婚」を物語のフィールドに設定している作品が目立って多いという事実である。これも、上記第一の特徴と同様重要な点と見做してよいが、なおかつ、本稿においては、積極的に取り上げるべき話題と思われる。なにゆえ「結婚」なのか考えなければならぬ。したがって、取り上げる作品のうち主なもの、そうしたグループから選ばれることになる。もちろん、作品一覧には「結婚」と関係のない作品も、(数は断然少ないが)散見されるし、また、「結婚」以外にも注意を惹く特徴を持った作品も種々認められることから、作品選択においては、その点にも留意しなければならないだろう。それら特徴を大まかにまとめれば、「狂気」、「探偵」、「幽霊」(あるいは「超自然」)等をその代表として挙げておく。

以上が、作品選択のおおよその目安である。これに従って、以下順次議論を進めてゆきたいと思う。

たとえば、コリンズの短篇小説のなかでも、名の知れた作品のひとつである「盗まれた手紙」(1854)をみてみよう。結婚しようとしている若いふ

たりが、手紙をネタに強請られ、相談を受けた弁護士が、探偵よろしく推理を働かせて、悪党の手から手紙を奪い返すという話である。あるいは、「グレンウィズ館の女主人」（1856）はどうだろう。騙されていかさま師と結婚する女の話だが、こちらは前者とは違い、円満解決というわけにはゆかない。単なる謎解きでは話が済まないからである。事の解決にはどうしたって悲劇が伴う。すなわち、結婚、悪党、あるいは、秘密とその暴露等々、設定や展開の点で互いに強く似たところがありながら、両者は根本的に性質を異にしているということである。なら、どこがどのように違うのだろうか。

まず第一に、「盗まれた手紙」と「グレンウィズ館の女主人」とでは、物語の長さが違う。それでいて、事件本体の物語全体に占める割合は、さして違わない。ようするに、両者ともに付与されている枠の構造の規模が相互に異なるわけだが、よくみると、この相違の意味するところは、思ったより深いところまで届いていることが解かる。その様子をまず訊ねてみることにしよう。

「グレンウィズ館の女主人」の物語は、ごくおもむろに始まる。最初に肖像画の話があり、それに釣りの話が続く。話し手と聞き手のふたりがタイトルにある館に到ったのち、ようやく物語の本体が動き出すといった調子であり、「盗まれた手紙」に比べると、用意周到、枠の構造が幾重にも重ねられている。用意周到なのは、それら枠の構造が、物語＝悲劇が本物であることの保証となるからである。それが証拠に、館に到った聞き手が垣間見る謎めいた少女こそは、物語＝悲劇の産物だということがのちに判明する。事件それ自体が珍奇であればあるほど、そうした保証の必要性が増すのは道理だが、ならば、さらに一步掘り下げて、なにゆえ事件がそこまで珍奇でなければならないのか、その理由を問いたい。

これに答えるには、「グレンウィズ館の女主人」と「盗まれた手紙」とのあいだのもうひとつの相違に注目せねばならない。その違いとは、ほかでもない、物語の負の主人公とも見做すべき登場人物＝悪党をめぐるものである。すなわち、簡単に云って、前者に登場するそれは、悪辣さの点で、

後者のその数段うえをゆくということである。といて、もちろん、そうした指摘も、作品に描かれただけの物語を参照したうえでの判断にすぎないが、あえて議論をそれら物語の現実に止めるなら、たしかに後者に登場する悪党は、前者のそれに比して、文句なく小物である。ゆえに、被る被害は、前者のほうがはるかに甚大ということになるのだが、ここで無理なく想像されるように、この被害の甚大さと上記事件の珍奇さとは、程度のうえで正比例の関係になっている。すなわち、事件が珍奇であればあるほど、受ける被害は甚大となるし、また同時に、物語の枠組みもぶ厚く念入りになるということなのだが、もしもほんとうにそうなら、そもそもそうした構図とは、いったいどのようなリアリズムのロジックに従ったものなのだろうか。

真っ先に云えることは、問題のリアリズムが本質的にネガティブな性質のものだということである。上述のとおり、物語の成り立ちのうえで重要な部分が悪党=負の主人公によって担われているとしたら、たしかにそうである。そして、このことは、事件の珍奇さや枠構造のぶ厚さの点で、あるいは、それらと悪党の度合いとの関係の点で、「グレンウィズ館の女主人」のほうが「盗まれた手紙」に勝つという事実からも裏付けられる。また、それゆえにこそ、後者は円満解決に到り、前者はそうならないのだが、この意味からすれば、前者は後者にも増して、同じリアリズムをより深く映し出しているとも云えるだろう。とするなら、注目すべきは、圧倒的に前者、すなわち、「グレンウィズ館の女主人」のほうであり、また、そこにおいて展開される悲劇の有り様のほうである。

悪党が男である以上、害を被るのは女と決まっている。両者を結び付けるのは、結婚であり、むろん、これがもっとも解かり易い。なにより、ヴィクトリア朝の当時において、(この点さまざまな先行研究が指摘しているように)、結婚は特別の意味を持っていた。それが証拠に、フランス文学とは対照的に、イギリス文学においては恋愛小説が極端に少なく、代わりに「結婚小説」が圧倒的に多いといった文学史の特徴も現象することに

なるのだが、とするなら、「グレンウィズ館の女主人」において、結婚を通じて女が悲劇に見舞われるのは、ただの解かり易さだけからではないだろう。ほかでもない、それでこそ、リアリズムが社会の（現実の）最底辺まで浸透し得るからである。だとしたら、書き手にすれば、選択の余地などない。コリンズの短篇小説に（あるいは、長篇小説を含めても）、結婚をネタにした作品が目立って多くて少しも不思議ではないことになる。コリンズにすれば、なによりそれでこそ作家としての使命がまっとうされるとも云えるわけだが、そのように考えてよいなら、コリンズのリアリズムがむしろ積極的にネガティブな形を取りたがるのも無理はない。円満解決で終わる「盗まれた手紙」ではまったく不十分だったのである。

ゆえに、以下においては、コリンズの negative realism とでも呼ぶべきものを明らかにしなければならない。先に挙げておいたように、コリンズの短篇小説には、結婚と並んでほかにも特徴的に認められる要素がある。そのひとつが「探偵」だが、それと問題のリアリズムとの関係を次にみとみることにしよう。

探偵については、現に、すでにみた「盗まれた手紙」にも、弁護士＝探偵が登場しているが、といて、謎解きの優劣がここでの問題なのではない。上記の議論からも明らかなおと、大事なものは、探偵によって導き出されるもの、それである。この点について具体的に作品に当たりながら明らかにしたい。取り上げるのは、1858年ハーバース・マンズリー・マガジン誌掲載の「結婚生活の秘かな企み」（‘A Plot in Private Life’）である。

例によって、この物語も、ごくおもむろにしか始まらない。語り手である召使いが第一の主人から第二の主人、さらには、その未亡人と勤めを続け、女主人の思ってもみない再婚、バイオリンの上手な牧師を交えてのいざこざ、匿名の手紙による密告ののち、ロンドンから到着した探偵ともども、姿を消した再婚相手の行方を捜し調査に乗り出すという話なのだが、ここで気をつけておきたいのは、この時点ですでに物語の3分の1が経過

しているという事実である。物語がそのような展開をみせるのは、もちろん、先に述べたリアリズムの所為である。物語の本体を成り立たせるためには、じつに念の入った養生が必要だった。そして、そうした養生の必要性和物語本体の非日常性とは、むしろ正比例の関係を成している。まさに奇談というわけだが、その内実は以下のとおりである。

ここでいう信じられない話というのは、いわゆる重婚(bigamy)である。姿を消した再婚相手が、場所を変えて、別の女と結婚した。匿名の手紙の内容とは、その事実を密告するものだったが、そうした密告内容の真偽を明らかにすべく、語り手＝召使いと探偵のふたりは、男の行方を追うことになる。悪戦苦闘しながらも、懐深い探偵の智恵が物を云い、密告の内容が真実であることを確認したふたりは、急ぎ館へと帰還する。だが、報告を聞いた女主人は、あくまでも事を公にすることを拒絶する。探偵は、心底がっかりしながらも、悪党はきっと自ら館に戻ってくるだろうと意味深長な言葉を残し去ってゆく。

言葉どおり、じっさい、男はふらりと館に姿をみせる。だが、どうにも間が悪かった。というのも、女主人は、近くに住む牧師相手にピアノとバイオリンの合奏を再開しており、折しもその最中の帰宅だったからである。そもそも夫婦が喧嘩することになったのも、音楽の才能からは縁遠い夫がこの合奏に嫉妬・反対し、妻が云うことを聞かなかったことに端を発していたからである。結果、当然のように、夫婦喧嘩は再燃する。ましてや、男はそうとは知らないが、重婚の事実はすでにばれている。だが、ここで奇妙な出来事が起きる。というのも、夜が明けてみると、男の姿がどこにもみえず、脱ぎ捨てられたガウンに血痕が点々と付いていたからである。くわえて、女主人付きのメイドも館から姿を消し、と同時に、治安判事が女主人と語り手＝召使いのふたりを亭主殺しの嫌疑で逮捕しにくる。ふたりを訴えたのは、姿を消したメイドであり、女主人に対する盗みを糊塗するためのふるまいだった。嘘の告発であるのは明白だが、訴えが出された以上、定まった手続きに従わざるを得ない。事件解決のため、ふたたびロンドンから弁護士が到着し、同時に、それに雇われる探偵も動き出す。そ

して、第三回目の公判、ふたりの活躍の甲斐あって、殺されたとされる亭主本人が出廷し、女主人と語り手＝召使いのふたりはめでたく釈放され、それとともに、メイドの盗みの悪事も最終的に明らかにされる。

残るは、そうした解決に到った経緯であるが、これについては探偵自身によって語り手＝召使いに対して逐一報告される。男の謎の失踪並びにガウンの血痕については、二重結婚の事実が露見していることを察知し、夜明けまえに男は館から逃げ出した。だが、その際、変装しようと髭を剃り、誤って剃刀で顔を傷つけてしまい、たまたま手近にあったガウンで出血を止めた。種明かしというのは、往々にして凡庸なものであり、たしかにこの場合もその例に漏れないのだが、それにしても、滑稽な話には違いない。くわえて、先に述べたように、いわゆる *negative realism* においては、その支柱を担う悪党こそ作品の出来を左右する。じっさい、コリンズの代表作である『白衣の女』が優秀なもの、なによりその点に由来しているのだが、とすると、この短篇小説は、悪党の甘さや弱さのぶんどけ間が抜けていることになる。事実、ここでの悪党は、探偵の手管によって巧みに誘導された末に、のこのこ裁きの場に出てくるし、裁判後は、第二の妻と海外で暮らしながら、二年後にはあっさりと病気で死んでしまうのである。

以上まとめると、重婚というじつに重いテーマを持ち出したまではよかったが、あとが続かなかった、そういうことになるのだろうが、その影響は、悪党がいわば作品のキー・パーソンである以上、他の登場人物にも及ぼざるを得ない。たとえば、本稿がいまここで着目している探偵がそうである。すなわち、探偵ミスター・ダークは、魅力的な登場人物であり、作者がその描写に力を注いでいることも明らかに覗えるのだが、如何せん、敵対関係に立つ悪党がそのように軟弱では、せつかくの実力も十二分には発揮できないで終わっている。結果、探偵の活躍の先にみえてくるものも、期待したレベルからはほど遠く、じっさい、被害者の代表たる女主人も、事件の結果みる影もなくやつれはするものの、徐々に元気を取り戻し、小さな幸せにむかって回復してゆく。ようするに、この短篇小説の結末もまた、円満解決のひとつなのだが、先に述べたように、それではコリンズの

求めるリアリズムには根本的に不似合いだった。けれども、ここであらためて物語をよくみると、この点目立って特異な人物がひとりだけいることが解かる。ほかでもない、盗みを犯す女主人付きのメイドである。

このメイド、いわゆる四分の一黒人である。西インド諸島の出身で、女主人とはそこで関わりを持つようになった。けっして短くない付き合いというわけだが、そのぶん生意気にもなっている。結果、窃盗と偽証という行為を通じて、そうした生意気さの報いを受けたと取れないこともない。だが、報いはそれに止まらず、じっさい、女のその後の運命は、悲惨そのものの転落を辿る。裁判の結果、女は流罪を宣告されるが、刑務所で刑の執行を待つうちに、まず内面的に崩壊してしまう。狂気の虜になった女は、刑務所に火を付けようとした末に、精神病院に送られ、そこで生涯を終えることになる。善人などとはとても云えない女だが、そこまで過酷な報いを受けねばならぬような悪人でもないし、じっさい、それほどの悪事を犯したわけでもない。にもかかわらず、ひとりこのメイドだけが突出して悲惨な目に遭わなければならないのはなぜなのか。あるいは、もっといえば、なにゆえこの物語はそうしたメイドをめぐるサブ・プロットをそもそも必要としたのだろうか。

理由のひとつは、先に述べたとおり、物語において *negative realism* の根底を担うべき悪党の軟弱さの所為である。すなわち、メイドにすれば、不幸にも選ばれてその肩代わりをさせられたわけだが、たしかにそのような肩代わりの結果もたらされた積極的な効果が物語から読み取れないこともない。おかげで、物語はそれなりに複雑にも豊かにもなっていると云えるが、同時に、所詮肩代わりは肩代わりの域を出ないというのも否定できない事実である。なにより、それでなければ、悪党の悪党たる意味がない。ようするに、1858年の時点の作家コリンズは、なおも発展途上だった、そういうことになるのだろうが、幸い若いコリンズには、まだ何十年も作家人生が残されていた。

探偵の次は、幽霊（あるいは超自然）だが、取り上げるのは、60年代

の空白期間を置いたのちに再開された後半の作品群からにしよう。前半同様、後半においても、コリンズの短篇小説をめぐる執筆活動は活発であり、じっさい、作品数の点でも引けを取らない。論じるべき作品の候補は幾つもあるが、まずはそのうちのひとつ、1875年カナディアン・マンスリー誌掲載の「ミス・ジェロメットと牧師」をみてみることにしよう。これも枠の構造を備えた典型的な作品のひとつである。

裁判録の新版を読んでいる弟の肩越しに牧師の兄がページを覗き込み、自身に関係したある事件を指して、自分が死ぬまで他人には話の内容を洩らさないという条件付きで事件の真相を語って聞かせる。約束どおり兄の死後行なわれた再話が、ようするに、目のまえの物語というわけだが、察しのとおり、語られるのは謎めいた物語である。むろん、それだからこそ、枠を付与する必要もあったのだが、なにはともあれ、肝心の枠の中身になる物語のあらすじをみておこう。

兄がまだ学生だったころの話である。チェルシーにあるプレジャー・ガーデンで友人と待ち合わせをした際、酔った男に絡まれる若い女を助けた。外国訛りのある美しい娘で、貧しく孤独な境涯の女のようなのである。ひと目惚れも同然、下宿まで送ってゆき、以後ふたりは交際を始めることになる。名をジェロメットといい、フランスの出だが、名字すら明かそうとしない。育ちはよさそうだが、どうしたわけか、幽霊の存在を固く信じている。恋人がいるものの、それについても詳細は内緒のまま、いつの日か恋人は帰ってくると確信している。また、そうなったときには、悲惨な結果に終わると解かっているが、きっと自分は恋人を受け入れることになるだろうと云う。恋人に関する限り自分に意思などないし、ようするに、男を愛してしまったのが身の不幸なのだ。

一年後、別れの刻がめぐってくる。母が死に、その臨終の際、父親の意向に従って牧師の道に進むよう諭され、その願いを受け入れたからである。女に別れを告げにゆくと、奇遇にも、女の恋人から手紙が届いており、結婚しよう、ただし両親が生存中は秘密にしてほしいと書かれている。涙ながらに女と「私」は別れるが、その際、生きている限り自分は貴女の友で

ある、困ったことがあったら必ず知らせてくれと頼み、女は女で、自分は若くして死ぬだろうが、貴方はその報せをきっと聞くことになるだろうと保証する。

そして、それから二年、「私」はすでに田舎で牧師になっている。夏に休暇でロンドンの実家に帰った際、依頼されて聴衆をまえに説教をやる。その折、説教を聞いて感銘を受けた若い紳士からアプローチを受け、田舎で牧師の仕事のかたわら教えている生徒のひとりに自分も加えてくれなしかと頼まれる。迷いはしたが、係累のよさを考慮に入れるよう周囲からも勧められ、ためしに教えてみることにする。

美男子でもあり、ゆえに、家政婦らの受けもよかったが、第一印象の悪さをどうにも払拭できない。それどころか、親しく付き合ってみれば、何事か隠しているようでもあり、なんとも怪しげな男である。告白を迫るものの、埒が明かず、嫌悪は軽蔑へと変わってゆく。そんな折、一通の手紙が届く。手紙を読んだ男は、血相を変えて旅支度を整え、急用ができたからロンドンにゆくと云い残し、いきなり出てゆく。その後、部屋を掃除していた家政婦が男の部屋にこんなものが落ちていたと云って一枚の写真を持ってくる。それをみて「私」は腰を抜かさんばかりに驚いた。なんと、写真に写っていたのは、ジェロメットその人だったからである。

彼女を苦しめていた恋人とは、自分の生徒となったこの謎の多い男だったのである。急ぎ自分もロンドンへと飛ぼうとするが、列車の便がなく、代わりにジェロメットに宛てて電報を打つ。だが、旧居はすでに取り壊されたあとだった。すくすくと帰宅する途中、別れの日に彼女が口にした言葉がしみじみと蘇ってくる。と同時に、どうしたわけか、背筋にぞっと冷たいものが這い上がってくる。月光に照らされた夜である。そして、「私」はみる。白い霧の柱が従いてくるのを。霧は別れの日に湧いていたそれであり、ぞっとする背筋の冷たさもあの寒い日に覚えたその再現だった。ジェロメットは死んだのである。予言どおり、霧の柱は人型を取り、別れの日の彼女そのままの姿となって現われる。そして、その翌日、新聞にロンドンで起きた殺人事件のニュースが載る。ふたりは、じっさい秘密結婚

をしており、そののち男が別の女に惹かれて喧嘩となり、女が手紙で妻としての権利を迫った。その末の事件だったのである。むろん、男が犯人として疑われたが、証拠不十分のまま事件は放置される。

以上がおおよそのあらすじである。コリンズの短篇にしては短いほうだが、いささかまとめが長くなったのは、手際の悪さというよりは、作品それ自体の成り立ちの所為である。秘密のうえに秘密を重ねるという方法を反映した結果、そうならざるを得なかった。じっさい、あらすじとは違い、物語ははるかに微妙な書き方がなされており、それにどこまでも忠実に従おうとするなら、あらすじはもはやあらすじでなくなってしまうと思われるほどである。あるいは、秘密のうえに秘密を重ねながら、たとえば探偵のような、それを解く人間が欠けているからかもしれない。ここではその代わりをいわば幽霊がするわけだが、同時に幽霊は幽霊で別の役割を担っており、結果、それには荷が重すぎたのだと云えないこともない。ゆえに、秘密は秘密としてどこまでも残される。表向きのプロットの裏側で展開されているはずのもうひとつの物語は、わずかに垣間見えるのみである。そして、これこそ、いわゆる negative realism の具体的有り様の一面を示すものとも云えるだろう。すなわち、裏のプロットを表のそれに回収してこそ、サブ・ジャンルとしてのミステリーはそれとして成り立つのだが、回収人（探偵）の不在の結果、裏のプロットはそれらしき痕跡をほうぼうに残しながらも、全体としては、秘密は秘密のまま流れてしまう。けれども、それでこそ立ち上がってくる深い闇があるというのも否定できない事実である。たとえば、幽霊にならざるを得なかった女の悲哀や不幸、あるいは、それらを避けられないものとした男の身勝手や残酷な社会の現実といったものである。探偵が理路整然とそれらを提示してみせるのに対して、幽霊はごくぼんやりと暗示するだけだが、とはいうものの、そもそも闇の深さとは、そうしたものではなかったのか。だとしたら、探偵のみが事実や現実を描き切っているとは云えないだろうし、なにより、探偵の登場する作品が、少なくとも表面的にはハッピー・エンドに終わらざるを得ないというのも、その解かり易い証拠のひとつと云えないこともないだろう。

結婚、探偵、幽霊と論じたいま、残るは狂気のみだが、上記作品をみても解かるように、コリンズの短篇小説においては、狂気は、ほぼどの作品にも偏在していると云ってよい。あるいは、顕わになる闇が深くなればなるほど、それに合わせて狂気の輪郭も明確になってゆくようにも見える。ようするに、negative realism がめざす先にあるものとは、その手の深化・明確化だということなのだが、もっといえば、個人的な狂気によって代理される社会のひずみ、あるいは、それによって表わされる限界とでも云えばよいのか。そのうえで、物語のフィールドを結婚に求め、めざす先にむかっての道案内を主として探偵が受け持つ。この一種のパターンをコリンズは、じつに数十年に亘って、飽きることなく繰り返した。なんとも畏れ入る話だが、逆にいえば、コリンズにとって、その種のパターンとは、確信以外のなものでもなかったということである。ゆえに、批評の側に戻していえば、この事実について論じる作業が、どうしても必要になることを意味する。じっさい、その作業なしでは、作家コリンズを真に理解することなどできないだろう。

いずれにしろ、コリンズが自身のもくろみを果たすには、短篇小説よりは長篇小説のほうが好都合だったということである。理由は、単純に、物質的な事情に拠っている。ようするに、より深いところに降りてゆくこととするなら、どうしたって、必要とされる紙数は増えてゆくことになるからである。コリンズの短篇小説が、多くは長めの傾向を持つのも、その顕われに違いないだろうし、あるいは、短篇小説の代表作のひとつ「夢の女」が、改訂に改訂を重ね、そのたびに物語が複雑になり長くなっていったという事実にも通じている。じっさい、1855年に「馬丁」と題され、ハウスホールド・ワーズ誌に発表された初出からすれば、1874年の最終版は、似ても似つかぬ姿になっている。そうした変貌ぶりを逐一辿るのは、疲れる作業になるだろうが、試みる価値はある。ただし、それも、本稿が主として長篇小説を論じるものだとすればの話である。ゆえに、ここは将来の課題として脇に置かざるを得ないが、そこで代替りの作業として、なおも短篇小説らしい姿をとどめていた段階の「夢の女」について論じてみ

たい。そうすることによって、コリンズのもくろみからしてなにが欠けていたのか、あるいは、そうした見方を短篇小説の側からどのように評価することができるかみてみることにしよう。

ふたたび、あらすじの紹介である。この物語にも枠が設けられているが、とりあえずは無視して、中身のほうに進むことにしよう。主人公は、馬丁を生業とするアイザックという名の男である。勤め口を探しに行った帰り道、ある宿屋に泊った。そして、夢をみる。夢のなかに女が出てきて、危うくナイフで刺されそうになる。それから、7年、アイザックはある女と知り合う。その女は、忘れもしない夢の女とそっくりだったのだが、母親の強い反対を押し切り、アイザックは女と結婚する。すぐに女は酒に溺れるようになり、結婚生活は破綻し、ついには眠っているところを妻に刺されそうになる。まさに夢の予兆どおりだったが、それが証拠に、そのとき妻の手に握られていたのは、夢でみたナイフと同じものだった。以来、男は、姿を消した妻がいつか戻ってきて、自分を殺すと信じ、夜も眠れないでいる。

以上あらすじをまとめるとそうなるが、解からないのは、なにゆえ男は女と結婚するのか、それである。というのも、男の母親は、夢のなかに出てきた女の容姿、ナイフの特徴等、紙に書き記して残していたからである。信じる信じないは別にして、見間違えようなないことだった。それとも、所詮夢の話と高を括ったのだろうか。なにより親孝行な息子である。にもかかわらず、事これに限って、ことさら強い愛着を女に対して抱いているようにもみえないにもかかわらず、それを裏切るような強引さを示すのはなぜなのか。

上述のとおり、コリンズの短篇小説において、結婚は特別な意味を持っている。その意味は、作品の数を重ねるに連れて、深さを増していったに違いない。してみると、「夢の女」初出という初期の段階では、その点、なおも未熟だったということなのかもしれない。それでいて、結婚は、やがては意味を深めねばならぬフィールドであり、ゆえに、多少無理をして

でも、男は夢の女と結婚せざるを得なかった。そういうことなのだろうか。いずれにしろ、このままではリアリズムを多く欠く。また、結果として、作中、なにゆえ諸々の出来事が起きるのか、その理由がことごとく神秘の闇に落下してゆくことにもなる。それでは、並みのゴースト・ストーリーとなら変わらない。それが証拠に、言葉では negative realism というものの、その実体は、けっして後ろ向きのもではなかったからである。それどころか、そうした negativity を極めてこそ威力を増すような形のリアリズムだった。とするなら、男女の結婚の動機が不明のままであるというのは、明らかにリアリズムのうえでの不備と云わねばならないだろうし、ここに尽きることのない改訂の必要が生じることにもなる。

改訂は、主として文章の追加という形を取るだろう。社会的な描写という意味でも、人物造型の充実という意味でも、そうなるだろう。その必然の結果として、現に「夢の女」で起きているように、物語はますます長くなってゆく。してみると、negative realism というのは、やはり、本質的に長篇小説に向いているようである。ようするに、ウィルキー・コリンズという作家は、根からの長篇小説作家だった、そういうことになるのだろうが、そのように考えてよいなら、作家コリンズの、あるいは、手法としての negative realism というものの、短篇小説における限界や典型も自ずとみえてくることになるだろう。すなわち、長篇小説へと向かう、その一歩手前で留まっているような短篇小説、たとえば、「警官と料理係」に認められるような有り様を探ってみなければならぬことになる。

いちいち詳述しないが、最初に、この物語にも枠があり、「ミス・ジェロメットと牧師」同様、さして長くない作品だということを確認しておく。あるいは、この物語にも、一種の探偵が出てくる。もとはタイトルにあるとおりの警官なのだが、物語を通じてその役職から逸脱して動き、最後にはそうした仕事それ自体を辞めてしまう。あるいは、この物語にも結婚が関係している。ひとつは、タイトルにある「警官と料理係」のそれであり、もうひとつは、殺人事件の発端となったそれである。いずれも実現

しない結婚であり、この意味でも、これはまさにコリンズの書いた典型的な短篇小説と見做し得る。殺人事件には、例によって、暗い過去が関係しており、それが秘密となり、事件を引き起こし、ミステリーそれ自体を成り立たせる。ここでの警官＝探偵は、外から事件を解決してゆくというよりは、その内側に巻き込まれつつ謎を解く。この謎解きには、いかにもミステリーらしく、ちょっとした小物とささいな出来事が深く関係しており、それらが決定的な役割を果たすことになる。ここで云う小物とは、ナイフ（あるいは、その柄に刻まれた銘）であり、それと、注文を記した紙切れといったものである。ささいな出来事というのは、探偵が取るに足らぬ不手際を犯し、その結果列車に乗り遅れてしまうといったものなのだが、とって、もちろん、最初からすんなりと正解に到るわけではない。それどころか、挫折や頓挫は、警官を頭まで呑み込み、辞職させ、ついにはそれを探偵へと変えてゆく。そのようにして物語が最終的に到るのは、ある種の絶望にほかならない。男の女に対する裏切りとそれを受けての復讐であり、それらは、当時の社会が抱えるアキレス腱とでも呼ぶべき欠陥、限界、ひずみ、闇といったものを、いっぽうにおいて代理し、同時に、それら代理の有り様が現実それ自体を指し示す。ノーマルに対するアブノーマル、正気に対する狂気という関係を取りながらそうする。結果は円満解決からはほど遠く、それが証拠に、警官＝探偵は、犯人＝料理係を特定しながらも、それを見逃しにしてしまうのである。

以上、negative realismの面から、「警官と料理係」の短篇小説としての様相をまとめると、そんなふうになる。これに登場しないのは、およそ幽霊（あるいは超自然）だけだが、この事実ひとつ取っても、いかにこの短篇小説が典型的であるか解かるだろう。と同時に、negative realismという点からすれば、幽霊（あるいは超自然）よりは、探偵のほうが登場人物として相応しいということも明瞭に解かる。曲がりなりにもrealismを謳うからには、それで当然なのだろうが、してみると、コリンズの短篇小説の成長過程のどこかで、なんらかの重要な分岐＝枝分かれが起きているとも考えられる。すなわち、いっぽうは探偵を導き手に据え、たとえば

「夢の女」がそうであるように、究極においては長篇小説を指向する作品であり、もういっぽうは、幽霊（あるいは超自然）を前面に押し出し、negative realism の様相をほうぼうに残しながらも、前者とは異なる小説的解決をめざす作品である。残された紙数は少ないが、最後に後者の例をひとつだけみておこう。

「ミセス・ザントと幽霊」というのがその例である。1879年の初出だから、「警官と料理係」同様、後半の作品群に属する。ある日の午後、娘を連れた男寡がケンジントン公園を散歩していると、奇妙な若い婦人に出喰わす。盲目のようでもあり、気が違っているようにもみえるが、いずれにしる、尋常な様子ではない。心配になった男は、婦人のあとを追け、下宿を訪ねる。さらには、その際テーブルのうえに残されていた名刺の主＝義弟のホテルにも行ってみる。義弟は医者だというのが、どうにも怪しい男である。男寡は、婦人（未亡人）の身の上話を義弟から聞き、不吉な予感に襲われる。そして、気づけば、その若い婦人にすっかり魅了されていた。

翌日、婦人からぶ厚い封書が届く。そのなかで婦人は、自分を守護する超自然的な存在について語り、義弟を警戒するようそれは警告するのだが、自分は気が違っているのだろうかと思いを求める。超自然的な存在云々については保留しつつも、義弟を怪しみ、婦人に味方すると決めた男は、面会のためさっそく下宿を訪ね、婦人の夫の急死には疑惑がないわけではないと知り、なおのこと義弟に対する怪しみを深める。

婦人は、転地のため、田舎の海辺にある義弟の家に行く。男も娘を連れて同地を訪れる。義弟の家には、風変わりな家政婦がおり、秘かに義弟に恋している。家政婦は、利害を同じくする男を誘い、自ら立てた策略に引き込むが、それを実行に移す過程で、ある不思議なことが起きる。すなわち、カタレプシーに陥る婦人に超自然的な存在が顕現し、同時に、義弟の身体が麻痺する。麻痺は回復しないが、義弟には、一生その面倒を看るといってくれる家政婦が付いている。男寡は婦人をロンドンに連れ帰り、将来のめでたい結婚を示唆して物語は終わる。

大雑把なあらすじで申し訳ないが、作品それ自体はとてもよく出来ている。冒頭の出遭いのシーンといい、病気の影響あるいは超自然的存在の庇護を受ける若い未亡人、あるいは、腹に一物を隠す悪党の描写といい、仕上がりはコンパクトでありながら、切れ味は鋭い。話題としての結婚も、ごく自然に機能しており、negative realism がいかに短篇小説において自らを理想的に展開し得るか示しているようにもみえる。あるいは、むしろ長篇小説を好都合とする negative realism の、短篇小説における限界を提示しているとも云えそうである。いずれにしろ、この際もっとも安易に想定されるゴースト・ストーリーとの結びつきについては、見直されて然るべきだろう。というのも、この短篇小説においては、超自然的存在が negativity の実現に貢献してはいるものの、なによりめざされているのは、むしろリアリズムのほうだからである。あるいは、それだからこそ、過度の充実を物語に求め、その結果、コリンズの短篇小説はどうしたって長くなってゆくのだが、そうした事態は、ゴースト・ストーリーというサブ・ジャンルには馴染みの薄い話だろう。もっといえば、サブ・ジャンルとしてのゴースト・ストーリーは、むしろ短篇小説のほうにこそ向いている。短さのほうにこそより親和性が認められるわけだが、残念ながら、その種の傾向は、コリンズの幽霊物には望み得ない話である。ほかでもない、テーマが、幽霊や超自然ではなく、それらを産み出す社会のほうに置かれているからである。それを思えば、ウィルキー・コリンズという作家は、やはりその本質において長篇小説作家だったと繰り返し云ってもよいが、そのいっぽうで、雑誌という魅力的存在が自ずとコリンズを短篇小説の執筆へと向かわせた。といて、この点事情は、前回取り上げたミセス・ギヤスケルとは大いに違っていた。たとえば、ミセス・ギヤスケルが、うえで論じた「夢の女」における改訂作業といった不毛な試みに身を委ねたとは、間違っても想像できないからである。

それにしても、短篇小説といい長篇小説とはいうが、およそコリンズという作家をみていると、それら枠組みは外的に押し付けられた制約にすぎないとも思えてくる。それが証拠に、コリンズの長篇小説は、当時の慣例

に従って、雑誌分載という形を取った。雑誌に載せるには、なるほど短篇小説のほうが便利だが、それでは気が済まなかったというわけである。周知のとおり、短篇小説と長篇小説の両方の長所を併せ持つところに、このヴィクトリア朝期に独特だった方式の存在意義はあったのだが、むしろコリンズはそうした方式の影響を存分に受けたはずだし、先輩のディケンズと並んで、その申し子だったと云えないこともないが、だとしたら、そうした便利な方式に衝突する外的制約とは、傍迷惑以外のなにものでもなかったに違いない。ミセス・ギヤスケルとは異なり、コリンズの短篇小説がジャンルとの関係で典型的とみえないのは、蓋し、当然の結果だったのである。

いずれにしろ、コリンズの短篇小説について論じるには、あわせてその長篇小説をも積極的に視野に納めなければならない。こうした事態は、ほかの作家には通常ありそうにない特徴と云えそうだが、「ミセス・ザントと幽霊」のような作品のほうが、むしろ例外的作品としなければならないとするなら、たしかにそうである。この点、『白衣の女』と『月長石』の両代表作が、コリンズの作家としての生涯の中心的位置を確固として占めているという事実は、じつに頼もしい限りである。それらは、長篇小説の傑作という域を超えて、前後に連なる諸々の短篇小説群をも照射してくれるに違いないからである。記憶しておくべき次の仕事と云えるが、次回以降は、ギッシング、ハーディーと順次出番を待っている。惜しい話だが、この話題も先送りせざるを得ない。

避けがたい結果には違いないが、以上本稿において触れた作品は、コリンズの短篇小説のうちごく一部にすぎない。紙数の制約という意味でも、あるいは、話題をむしろ意図的に negative realism の一点に限定したという意味からも、本来ならアンソロジーに収められて当然の作品を多数見過ごしにしてきた。最後に、その埋め合わせを少しだけしておきたい。

コリンズの短篇小説を収めた種々のアンソロジーを見渡してみると、後半より前半の作品群から選ばれたものが多いようである。その理由を簡単に断じるのは難しいが、ひとつには、前半の作品群のほうがヴァラエティ

## 短篇小説論 (11)

に富んでいるという事実が挙げられる。たとえば、「狂人モンクトン」、「恐怖のベッド」、「家族の秘密」、「死んだ手」と並べてみると、長短さまざま、結婚、探偵、幽霊、謎解きとお馴染みの要素が共通してみられるうえに、狂気あり、恐怖あり、不思議ありといった具合に、あるいは、negativityの程度の点でも、じつにみるべきものが多い。それが、後半の作品群となると、タイトルひとつ取っても、「ミセス・ザントと幽霊」、「警官と料理係」といったふうに、むしろパターン化されてゆく。内容に目を向けても、結婚に数奇が絡むといった類の物語が多くを占めるようになる。アンソロジーというものの役割りからすれば、それでは困るというわけだが、それにしても、そうした後半の作品群において認められる特徴を、読者は後退とみるべきか、あるいは、成熟と取るべきだろうか。短篇小説家コリンズを評価するうえでは、重要な問題と思えるが、これについても、別の機会を待つしかないだろう。代わりに、その折取り上げたい作品の候補として、たとえば、「ミスター・パーシーと預言者」、「ミス・マイナと馬丁」、「ミス・モリスと見知らぬ男」、「ミスター・リズモアと未亡人」、「ミスター・レペルと家政婦」等々タイトルを挙げておく。

\*本稿においては、Julian Thompson 編集の *Wilkie Collins: The Complete Shorter Fiction* (Carroll&Graf Publishers, 1995)をテキストとして使用した。